

園と家庭との連携を考える(6) 生活能力の調査から

小倉美代子
(岡山県苫田郡 加茂保育園)

1. はじめに

父母及び祖父母の育児学習の場として家庭教育学級の設置。そこでの母と子の遊びや作業、父親の保育参加、祖父母の保育参観など家族ぐるみを対象とした家庭への働きかけを試みている。園での保育は生き生きと主体的に生活できる子どもの育成を目標に、乳幼児の生理的(本能的)な欲求が満たされる環境、遊具の整備、保育の施設などに配慮しながら実践を重ねている。

家庭との共通の育児観を得ながら進めている保育の中で園児の生活能力がどの程度習得されているかを把握し、今後の保育、家庭育児のあり方の参考にとることを目的として調査を実施した。

2. 調査

方法 質問紙法 園児の家庭に配布し回収
内容 「日本の幼児の成長・発達に関する総合調査 10 生活能力」(松原 1984) - 別資料

時期	昭和63年10月下旬	表1 (単位:人)
対象児	1才前半 1才後半 2才前半 2才後半 3才 4才 5才 6才 計	
回収率	男 3 4 4 5 18 7 12 1 54 女 1 5 1 3 12 15 14 2 53 計 4 9 5 8 30 22 26 3 107	
100%		

3. 結果と考察

評価は“Aできる”のみを得点とした。松原(1984)との比較により、園児の生活能力の発達について検討していく。調査対象数に大差がある事を考慮する。

(1) 生活能力全体の発達 図1

図1から 全体的には発達が上まわっていることがわかる。1才前半と6才の対象数が少ないため1人の得点に左右されている。

(2) 生活能力の領域別発達

比較をして差の大きい項目をとりあげて考察をする。

A 睡眠の発達 図2

全体に得点が低く年令が進むにつれて開きが大きくなっている。夜中にひとりでおしめをはずしパンツで遊ぶようにしているため 家庭でもはづしているようだ。排泄を知らせたり便所での排泄も早くなっている。おねしょの子も多い。朝の大便は不規則である。

B 排泄の発達 図3

1才を除いて発達曲線はほぼ同じである。1才をすぎると園では暇かい時にはおしめをはずしパンツで遊ぶようにしているため 家庭でもはづしているようだ。排泄を知らせたり便所での排泄も早くなっている。おねしょの子も多い。朝の大便は不規則である。

C 着脱衣の発達 図4

全体に同一の傾向を示している。特徴は2才から3才にかけてめざましい発達がみられることである。ひもが片結びできる子は4才ですでに81.8%に達し、差が大きい。

D 清潔の発達 図5

1才前半、後半の高得点に比して5才、6才と低くなっている。項目別にみると手洗い、歯みがきが5才、6才で年少の頃より低くなっている。自発性の面からも検討する必要がある。顔洗いはよくできている。質問の受けとめ方が年少児と年長児の場合はちがって得点に関連していることも考えられる。

E 食事の発達 図6

1才児が高くなっている。1才前半で1人で食事をしようとし、こぼしながらも自分で食べているためと考えられる。これを許容できる大人の意識を高めるための学習もしている。魚の骨をはしでよりわけられるのは5才で70.6%、6才では100%に達している。松原の調査の48.3%、60.8%との差が大きい。

F 身体の機動の発達 図7

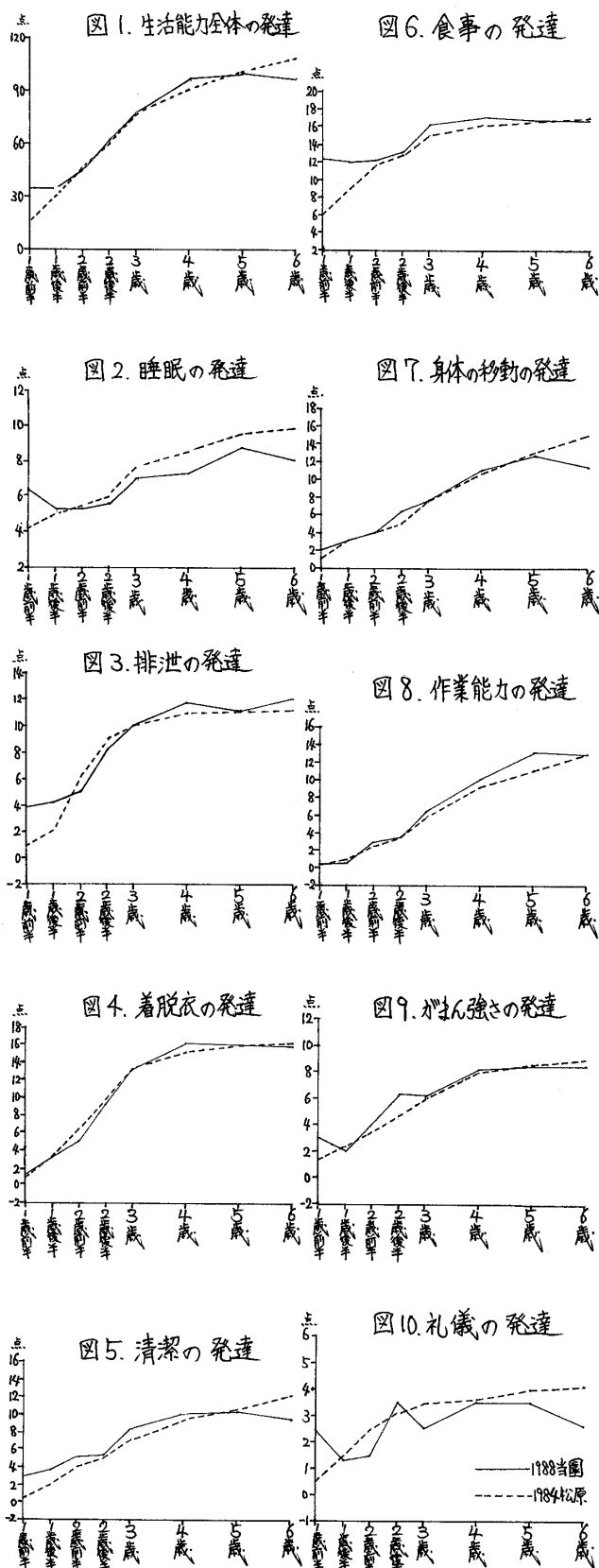
進んだ後の片付けができるのは5才、6才も40%に満たない。食事の手伝いは5才、6才ではほとんどできている。木のぼりは3才で70%、6才で100%に達しており松原の調査の15.0%、62.3%との差は大きい。園庭での木のぼりが役立っているようだ。

G 作業能力の発達 図8

3才から目ざましい発達がある。得点の高い項目をあげると そうさんしぼり、箸で豆をつまむ、草とり、園芸の手伝い、マツチでの点火、かなづちでくぎが打てる、衣類をたためる、特にちよう結びができる は5才で76.9%通過しており、調査の21.5%との差は大きい。園の保育の特徴がこの領域で発揮されている。ひし形の模写は低い。

H がまん強さの発達 図9

5才を除いて遅くまでテレビを見ないの得点が高い



のは テレビの害について訴えているためと思われる。
ひとりで留守番ができるが低いのは 祖父母との同居

のためひとりになることが少ないと考えられる。

1 礼儀の発達 図10

全体に低く 年令に比べて発達していない。「ごめんなさい」がいえるが著しく低い。

(3) 発達差による分類の検討

ア 手の器用さに関するもの

松原の調査よりすぐれている項目をみると、5であげたものの他に魚の骨をはしでよりわけ、はしと茶わんを両手で使用できる、大便の時紙を使用して始末ができるがあげられる。これは「生活習慣と手のはたらき」を課題に10年以上の実践をしている成果と考えられる。

イ 手伝いに関するもの

同じくすぐれている項目に 食事の手伝い、草取り、園芸の手伝い、自分の寝床の始末、衣類をたためる、完全にひとりで食事ができるなどがある。これらもアの課題の中に含まれている

ウ 自覚性に関するもの

3才頃まではよくて4才、5才になって低下してくる手洗、歯みがきは園ではよく習慣づいており 家庭でも実行する手だても働きかけているが自覚性は発達していない。朝の大便についても同じことがいえる。

エ 家庭評価にみられる偏見

母親の評価は保育者の評価と大体一致しているが、少数の過大評価と過少評価があった。得点差10以上は過大5名10~21点、過少3名12~18点である。この園児たちに共通していることは、よく泣く、指しゃぶりをすることである。とりわけ過少の場合は「わけもわからずに泣き続ける」という見方をされている。

4 まとめと課題

調査結果の比較は園児の実態把握となり 園の保育の評価ともなった。園児の特徴、保育実践の結果が明確になったことや母の職業の有無、祖父母との同居における同一傾向などがみられたことは意味深いことであった。発達の著しいのは作業能力である。この領域については意図的に生活の中にとり入れて訓練すれば能力の習得が可能であることが明らかになった。食事、清潔なども集団生活の中で乳児から習慣づけを行えば好ましく発達することもわかった。園での生活が家庭生活にも影響を及ぼしていることと 家族の学習がそれを助長しているためであろう。発達の遅れのみられる睡眠、礼儀については家族構成、意識、更に保育者の態度を含めて再度見直し今後の学習課題としてとり組む必要がある。又 自覚性の発達が年令に伴わないことについても熟慮しなければならない。